

日々に生きる愛

— 母から娘へ —

田中澄江

家の光協会

田中澄江（たなか・すみえ）

1908年、東京生まれ。東京女高師（現お茶の水女子大学）文科卒業。聖心女子学院教師、京都日々新聞記者等の職業経験がある。二男一女の母。夫君は劇作家の田中千禾夫氏。

おもな著書は『愛し方愛され方』『この人を愛していいか』（青春出版社）、『私の旅 私の花』（大和書房）、『虹は夜』（講談社）など。ほかに、NHKテレビ小説『虹』の作者としても知られている。

日々に生きる愛——母から娘へ——

定価 五百六十円

昭和四十七年三月二十日 第一版発行

著者 田中澄江

発行者 奥原 潔

発行所 家の光協会

東京都新宿区市谷船河原町十一

印刷 大文堂印刷株式会社

製本 寿製本株式会社

落丁本、乱丁本は
おとりかえいたします。

日々に生きる愛

——母から娘へ——

／目

次

女のしあわせ……………5

女の生き甲斐……………6

生き甲斐は自分で捜すもの／なにより大事な家庭／責任ある結婚
婚を／どこの国でも男は男／夫婦の味／愛すること

結婚と愛情……………28

大げさすぎる結婚式／愛は一生かかって築くもの

私の結婚……………38

何のために生きるのか／神を信ずる心／純潔への考え方

日本の女……………52

性道德ゼロの『源氏物語』／屈辱に満ちた明治の女／許された
男のわがまま／処女軽視の現代

愛の心……………65

子どもを持った喜び／駆け出し時代／草木に親しむ／踏みにじ
られた花／お化粧／山ひと筋の人生／日光路／山野の花／山歩
きのすすめ／高山植物／山伏神祭／自然をいつくしむ心／ある
再会／無理のない泳ぎ／自然を甘くみるな／金か心か／ある名
将の墓／エデンの東／通じ合う心／スペインの旅／盲人と着物
／メリー・ウィドー／自分のテンポ／うちかけとかつら／新婚

目次

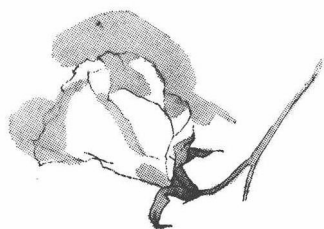
列車／生き甲斐／山小屋のストーブ／汽車の旅／クリスマス／
心の整理／年のはじめ／ことばと心／沈黙の重み／秩父にて／
尾根の細道／二月の草花／庭のウメ／心暖まる手紙／おひなさ
ま／世に出る娘さんへ／サクラソウ／自分を大事に／武士興亡
の跡／古戦場で思うこと／山口、萩の旅／津和野

美しき青春

燃えさかる魂	146
他力本願になるな／孤独を生きる強さ	
幸福はどこに	150
真実を知らない幸福／不幸が幸福を生む	
表情の美しさ	156
顔は偽らぬ心の鏡／天与の顔に人工の手／人工の渦に巻かれず に／若い人たちの美しさ	
世に出る娘さんへ	162
まず親を喜ばせ／家庭の熟練工に学ぼう	
愛すること愛されること	167
相手のなかに発展していく／愛する喜び／嫉妬は人間失格	
純潔について	172

人間であること／この世から痴漢の絶滅を	175
娘のためによいムコを	175
良縁を望みすぎるな／人につくす優しさ	177
読書のすすめ	177
私の読書遍歴／恋愛小説の読み方	185
若い友へ	188
新しい愛情	191
働く女たち	192
悪女の嘆き	205
愛情はこうして築かれる	215
舩倉島の女たち	229
あとがき	229

女のしあわせ



女の生き甲斐

生き甲斐は自分で捜すもの

私は、若い人たちから、自分の将来の方針などについて、よく手紙で、いろいろ相談を受けることがあります。なかには、死んだほうがよいか、生きたほうがよいか迷っているといった、ハムレットばりの手紙をよこす人もあります。

そういう人たちは、非常にせっぱつまった気持ちから、おそらく、回りの人たちに相談する心のゆとりもなく、そうするのだとは思いますが、突然、見も知らない私などに相談を持ちかけるよりも、自分がいままで育ってきた歴史なり、生活環境なりをよく知っている友だちや、学校の先生、あるいはおかあさんなどに、まずよく相談してごらんなさいと言って、返事を出します。その人について、いろいろと予備知識を持っていなければ、とても充分な回答ができるはずがないからです。

私にも、十代のころには、そういった経験があります。死のうか生きようか、などというほど深刻なものではないけれども、学校を出たら何をしようか、とか、自分にはどんな才能があるのだろうか、はたして人間は生きる価値があるか——などなのです。

私が受けた教育は、学校の教師になるためのものでした。つまり、女が職業を持ったためのものです。これにたいして、自分にどれだけ適応性があるかどうか、それにふさわしい人間であるかどうか、というようなことについても、ずいぶん悩みました。

教師という職業は、非常に責任の重い仕事です。工場で道具を作るとか、染色で反物に絵を染めるとかいうような仕事、あるいは画家になるとか作家になるとかいうようなことは、自分ひとりでやればいい。しかし教師は、生徒の一人一人が、どきどきと脈打つ心臓を持った、生きた人間。しかも、自分の人生はどうあるべきかなどと、心に悩みを持っている人たちと、毎日直接に対面していかねければならない仕事ですから、はたして自分にふさわしいかどうか、ずいぶん考えました。

また一方では、女には結婚の問題もあります。いまでもそうですけれど、とくに、私どもが育った昭和のはじめごろには、結婚ということは、男の生活に女が自分を合わせて生きていくのが当然とされていました。女がなにをするかということではなく、相手の男がなにをしたい人間かによって、女は自分の道をたどらねばなりません。そうなれば、女の地図は、男に合わせて書かなければならなかった時代です。

結婚生活にはいつて、はたして自分の勉強が続けられるかどうか。教師という職業を、結婚生活のなかで、はたしてやっていけるかどうか。そしてまた、自分が結婚生活にふさわしい人間かどうか、考えてみなければなりません。

私は、数年前に、NHKでフランスのポーボワールという婦人と対談させられたことがあります。ポーボワールは、実存主義の作家として世界的に有名なサルトルと、共同生活をしている人で、愛情を持って結ばれています。結婚生活の枠の中にはいると、自分の才能が伸ばせないという考え方から、生活はともにしないといった、たいへん独自の生活を展開している人です。女は、女として生まれるのではなく、つくられるものであるというのが、ポーボワールが書いた『第二の性』という本の内容です。

そのころ私は、まだ主人の母も生きていて、いっしょに住んでいましたし、家には三人の子どももいるという、彼女から見れば牢獄のような、たいへん制約のある場所で仕事をしていたのでした。それに引き換え、彼女は、サルトルの夫人とも言われていますが、家庭をつくらないで、自分の才能なり生き方なりを、自分を中心にしてコンパスを立て、回りにぐるりと線を引くといった生き方ですから、なかなか両方の話がかみ合わずに、困ったことを記憶しております。

ポーボワール夫人のばあいは、ちょっと特殊な例かもしれませんが、女の生き方には、私のように、家庭にあることを自分の生活の中心におく生き方と、家庭を切り取ったところに自分の生活をおく生き方の、二つの生き方があるのではないかと思います。

どういうふうに自分の生活の方針を決めるかは、人に聞くよりも自分で考え、選んで、選んだ道にたいしては誠意を持って努め、いいかげんに投げ出さないことです。そのなかで悪戦苦闘しながら、自分の行くべき道を捜し求めていくという生き方が、よいのではないかと思います。

私は、よく週刊誌や婦人雑誌などで、＼女の生き甲斐はなにか＼といった題で話をさせられたり、原稿を書かされたりしますが、生き甲斐などといったことは人に聞くものではなく、自分で発見するものだと思います。本のなかに、自分の生き甲斐を捜そうなどという考え方は、いわば怠け者の考えることです。

もし、朝早く起きて、いつもと違った空気にふれたとします。朝五時に起きると、六時に起きるのでは、太陽の光線が地上を照らす照らし方が違います。こんなに朝の光線は美しいものだったのかと、新しい発見に驚くかもしれません。その一時間が、その人にとって生き甲斐と思えるのではないでしょうか。

また、通学の途上、いつもむこうからくる上級生か下級生がいて、どうもこちらを見る目つきに敵意が感じられる。こちら好感が持てない。そんな相手にたいして、ある朝「お早うございます」と挨拶してみます。そして相手からも「お早う」という返事が返ってきたとします。そのひとことで、これまでのわだかまりはすっかりなくなってしまう、その日一日は、学校に出いてとても気持ちがいいはずですよ。そうした小さなことでも、自分がつかみ取った喜び、生き甲斐は、人から教えられたものよりも、はるかに値打ちのあるものなのです。

なにより大事な家庭

私を書いた『虹』（NHKテレビで昭和四五年四月から四六年三月まで放映）について、よく

自分の家庭のことを書いた自叙伝ではないかと人に言われます。しかし、これは自分のことを書いたものではなく、このような生活がのぞましいといったような、ひとつのあこがれを書いたものなのです。あのなかに出てくる主婦は、家庭のためにいっしょうけんめいつくし、しかも勉強する志も失わないでいます。私は、その程度で生きることが、女としていちばんしあわせな生き方ではないかと思っています。

現実の私は、もっと苦しいことが多かったのです。『虹』を見て、私の友だちなどは「あれはほんとにつまらない。あなたは、もっともっと苦勞が多かったはずだ。その苦勞話を書けばよかったのに」と言います。

『虹』のなかには、四人の子どもがいて、家のこともよく手つだうし、台所にもよく立つし、掃除もします。しかし、実際、私の子どもは三人ですし、いちばん上の子どもは、脳腫瘍というたいへんむずかしい病気にかかっていました。いまでも視力が半分しかなく、白い杖をついて歩いています。その後、また病氣をして、八年も学校に行けず、家で家庭教師をつけて、ずっと勉強させてきました。

しかし、いくら知識を詰め込んでみても、それには限界があります。人間がおとなになると、世の中は自分だけではなく、隣りにはたえず他人がいるということを知らようになります。自分の欲望は伸ばしほうだいにはせず、他人の迷惑になるようなことはしない。そうしたことをわきまえさせることが、子どもがおとなになるときに必要な、いちばん根本になるしつけなのではな

いでしょうか。

なにか、戦後の日本には、そういう教育があまり行なわれないで、とにかく自分を主張し、自分を伸ばすことがよいという考え方が、強くはびこっているような気がします。自分も大事だけれども、同時に他人もまた大事だから、自分を主張すると同時に、他人の主張も聞き、その両方から一つの結論を出す。これがほんとうの民主主義の社会です。

私はよく学生運動をする学生に会いますが、その人たちは、自分の主張を持っていて、一方的にそれを主張します。しかし、それなら、これについてはどう思うか、これがこうなったらどうなるのか、というように聞いていくと、こちらの言い分は全然聞こうとはしません。そして、自分の主張だけを展開し、集団の力で、自分たちの主張を押しまくる傾向があります。そうしたやり方は、やはり独裁的なもので、けっして、ほんとうの民主主義ではありません。ほんとうに民主的な社会に生きるといことは、他人を大事にし、同時に自分も生かしていくことでなければなりません。

こうした面を育てるには、家庭教育のなかだけではむずかしいものです。家庭のなかにばかりいると、知識は吸収できても、他人とのつきあいのなかで、自分を抑制するということを覚えません。そのため、やはり病気であった子どもを学校にやりたいと思いました。

私には、高校の校長をしていたり、教頭だったという知り合いが多かったのですが、いざ子どもを学校に入れるとなると、どの学校も、進学勉強に忙しく、何年も遅れた子どもを受け入

れてくれません。視力が標準の半分もなく、からだの弱い一人の生徒を抱え込むということは、学校としてもたいへんな負担になり、困るというわけです。そのため、普通の高校に入れることを、あきらめなければなりませんでした。

みんなが健康で、若さをそのまま発散させている楽しい校庭と、白い杖をついた子どもの手をひいて、入学を断られて帰ってくる母親。こうした場面をドラマにすれば、たしかに劇的ですし「ああ、かわいそうに……」と言って、世間の人々は同情するかもしれませんが、この子どもは、あとで定時制高校に入れたのですが、定時制は夜間ですから、東京のように交通の激しいところでは、一人で学校へ通わすわけにはいきません。私は、新たに手つだいを頼んで、雨の日も風の日も、送り迎えしてもらいました。自分の仕事場から迎えに行ったこともありますが、これもドラマになるかもしれません。

定時制高校を出たあとは、早稲田大学とか東京教育大学の、自分の好きな講座の聴講生として通わせることにしたのですが、自分ではノートをとれないので、私が、二十代の若い学生と並んで、ノートをとらなければなりませんでした。和服姿の私は、そのなかで目立つだろうし、こうした場面をドラマに取り入れると、「自分の子どもは、普通の学校へ行っているけれども、田中さんは、ああいう子どもさんを持っているのかしら……」と言って、興味の対象になるかもしれません。

しかし、私は、『虹』のなかではそういう場面は、ひとつも書きませんでした。それを書くこ

とによって、劇そのものはおもしろくなるかもしれませんが、それを見たり聞いたりする子どもが、自分の母親は、自分のためにこんなに苦労しているのかしら、自分でもつらいから、こんなことを書くのだろうと思ひ、肩身の狭い思いをするのが、私にはたまらなかったし、耐えられなかったからです。

また、娘は一人だけですが、小学校のときから音楽ばかりやっていて、家事などの手つだいも全然しなかったし、学校を出ると、すぐヨーロッパへ行き、もう六年も帰ってきません。普通の家庭では、女の子もがいてと親は助かると思うのに、わが家では、さらに外国の学校へ行きたいと言って家を出て行く。こうした娘の存在を私が書いたとすると、それを読んだ娘は「おかあさんは、私が勉強しているのを、こんなににつらく思っているのかしら」と言って、思い悩むかもしれません。そんなことのないように、私は、実際の生活よりずっと楽な状態を想定して『虹』を書いたのです。

これは、たとえ作品は少々つまらなくても、私が自分の家庭が大事で、自分の子どもたちに心の傷を与えたくないと思ったからにはかなりません。

責任ある結婚を

最近、若い人たちの間で非常に離婚がふえています。たとえば、物を書く人間だとか、これから勉強しようとする若い人のばあい、結婚するとなにもできないから、別居して愛人関係という

ことで男と暮らし、子どもも生まないで自分の勉強をする。あるいはまた、結婚してみたら、男の両親と意見が食い違い、「私は彼と結婚したのです。彼の家と結婚したわけではありません」と言つて、家を飛び出してしまったのかもしれない。

マスコミなどでも、そうした離婚を、新しい女の生き方のように取り上げています。アメリカで離婚がふえているので、それがひとつの新しいさの尺度になるというわけです。私にたいしても「世間では離婚がふえているのに、あなたは三十何年も一人の夫を守り続けていますが、それはどういうわけですか」といったような質問をする人がいます。私は、まだ一度も離婚しようと思つたことがないし、それが結婚生活の常態だと思っています。

私は仕事の関係で、女優さんや歌手に知り合いが多いのですが、彼女たちは、とくに離婚に踏みきるのが早いようです。私に聞けば、そうした消息がわかるところでしようか、「どこかに離婚しそうなカップルの話を聞きませんか」と言つて、毎週のように、週刊誌などから問い合わせの電話がかかってきます。また「だれそれとだれそれが結婚したけれども、いつごろまで続でしようか」といったようなことを聞いてくるものもあります。

結婚ということになれば、いちおう誓約を交したはずですが、そのことばを、頭の上を通りぬけることばとして聞き流している人もいるかもしれませんが、人間である以上、それを守ろうという意志が働いているのが普通です。にもかかわらず破れてしまうのは、その人に耐久力がないのか、性格的なものなのか、いろいろあるでしょうけれども、それがあたりまえだと思われては困